



会員 外山 大地

弁護士デビューから早1年

1 はじめに

「君の作る契約書には血が通っていない」

昨年12月に弁護士登録を行い法律事務所で勤務を経た後、現在企業内で働く、いわゆる企業内弁護士である私が、直属の上司から言われた一言である。

長年目標としていた弁護士になり早1年。七転八起しながらも、日々密度の濃い時間を過ごしている。その中で、日々充実感に浸りながらも、その時間の経過の速さに驚きを隠せないでいる。

今回、クラス別研修にてお世話になっている担任の方から、執筆依頼をいただいた。何かの縁だろうか、弁護士生活が始まってちょうど1年という節目に掲載されるとのことだ。そこで、執筆依頼に運命を感じたことや、約1年におよぶ弁護士生活を振り返る意味でも筆を執らせていただくことにした。

本稿では、短い期間の中で、法律事務所と企業との両者における勤務により感じた業務の違い、日々つきつけられる現実、そして今後の抱負を述べていきたい。

2 業務の違い

法律事務所と企業における勤務との間で感じる違いは多々あるが、何とんでも当事者として業務を遂行するか否かが、一番の違いであると思っている。これは、(企業の)外部弁護士と企業内弁護士との比較で必ず指摘される点であるが、本当に大きな違いであると感じている。

例えばプロジェクトの進行一つとってみても、法的リスクはもちろん、企業内における内規や経済状況等様々な事情を考慮しなければならない。企業内の事情は当事者として業務を遂行しているからこそリアルタイムで見えてくるものであり、企業内で働く醍醐味だと思っている。

3 日々つきつけられる現実

契約書のチェックをはじめ、訴訟対応、事業におけるリスクヘッジ等、様々な業務に携わっている。時にはプロジェクトの進行に関わる重要な会議にも同席させていただくなど、貴重な経験をしている。

それと同時に、否が応でも感じさせられるのは、他の法務部員との圧倒的な経験値の差である。

冒頭で記載した上司の言葉は、それを痛感させられた一場面である。

つまるところ、実務の実態はもちろん、事業リスクを前提とした先方との細かい駆け引きや営業担当の方の気持ち等を考慮した上で契約書を作成する必要があり、そこで初めて「血が通った」契約書になるとのことだ。

もちろん、上司から当該事項を指摘されるまで、理解していなかったわけではない。しかし、20年以上も実務に携わってきた百戦錬磨の者からすれば、それは理解したつもりでしかなかった。やはり、そのような者と多少法律知識を備えた実務経験が乏しい者とは、天と地ほどに実力が乖離しているのであった。

4 最後に

企業内弁護士における顧客は、企業そのものであり、そこで働く従業員であると思っている。

そうすると、社内にいる従業員から信頼を得ていく必要があり、そのためには、一つ一つの仕事を丁寧にこなさなければならない。当然のことながら、働くフィールドが法律事務所であれ、企業内であれ、その基本姿勢は変わらないと思っている。

5年後、10年後、私がどのような弁護士になっているかは分からない。しかし、どんな弁護士になつていようと「血が通った」仕事をしていきたい。